これ等諸篇はすでに新聞雜誌等に揭載したものであるから、改めてその內容を紹介する必要を認めないであらう。從つてこゝでは單に題目だけを揭げることゝする。

「支那上古の社會狀態」「殷墟に就いて」「染織に關する文獻の研究」「北派の書論」「紙の話」「支那の通貨としての銀」「宋元板の話」「概括的唐宋時代觀」「近代支那の文化生活」「民族の文化と文明に就いて」「支那人の見たる支那の將來觀と其の批評」「支那に還れ」「東北亞細亞諸國の感生帝說」「女眞種族の同源傳說」「日本滿洲交通略說」「古の滿洲と今の滿洲」「昔の滿洲研究」。

これに依つて知られる如く、本書に收められたるものは支那滿洲に關係するものゝみである。研究の對象としては政治、經濟、社會、民族、文化に及び時代からいふならば殷代から現代に亙つて居る。又諸論文の執筆の時期をみるに明治四十年から昭和八年、卽ち故博士の學究生活の初期から晩年に至るものを含んで居る。

本書の特色とするところを略言するならば、專門的題材を一般の人々に容易に理解せしむるように述べて居る點である。理解の容易はやゝもすると識見の凡庸を意味する相言葉として解されやすいが、本書は全くその反對で故博士の該博な學殖と卓拔な見識を示し、その學風を如實に窺ふことが出來るであらう。

偖て本書に收められた論文中、爾後の研究の結果若干揷ふべきところが發見されるとしても、これらの研究の悉くはその當時に於ては全く前人未踏の分野を開拓したものであつて、單にこの點のみから考へても、現在は勿論今後と雖もその獨自の價値は高く認められるべきものである。

猶本書の卷頭には羽田博士が序文を寄せられ、本文中には處々に圖版を挿入して理解を一層便ならしめて居る。（菊判、定價參圓弘文堂發行）〔小野〕

○Ferdinand Lot; Les Invasions germaniques, Paris 1935

著者ロートは現パリ大學教授、中世研究では先づフランス學界を代表する人としてその定評はすでに國際的なものとなつてゐる。氏の研究は從來專ら中世初期の範圍に集中せられ、これまでに既に十餘篇を數へるその著述においても、十一世紀以後に關するものは殆んど見られない。同時にその學風も、獨創的見識に富むといふよりも寧ろフランス風の實證的堅實さにおいて特徵を認めらるべきである。したがつて同じく中世初期研究家としてもウィーンのドプシュのやうに學界の方向をリードしてゆくやうな獨創的迫力には乏しいけれども、概して穩健妥當であり時に當識論的低調さを伴ふことはあつても讀者に不安を感ぜしめることがない。而もその反面には學界の進步や問題の推移に對して頗る敏感な神經を有ち、新學說に對しては常に率直に、時にはむしろ大膽に、それをとりいれてゆく進步的長所をもつてゐる、その間の判斷は極めて明快且つ適切であり良心的である。この意味で氏はむしろ數年前に故人となつたイギリスのベリー（Bury）に近き型の學者と考へられ、その著述は現在の中世研究の水準を示して而も初學者を謬らしめないといふ良き意味での入門書となる性質をもつ

のである。

一九二七年に公刊せられ名聲を博した「古代の終・中世の始」(Fin du monde antique et le début du moyen âge) の如きも、氏自身の獨創的部分は私にはむしろ乏しいと考へられるけれども、ともかくロストウツェフ、ゼーク、ドプシュ諸氏以來の緊張せる研究狀態をば綜合して、この困難なる時代に對し一應の體系的叙述を與へたその功績は充分に評價せらるべきものであつた。のみならず三世紀以後に對して pré-moyen âge といふ特定の時代區劃の下に特殊認識を樹てんとする要求、ローマ帝政は前半と後半とにおいて對蹠的に相異し一つの歷史時代でない、帝政後期は決して古代史の一部分でないといふ固き確信の下に書かれた前卷の部分は新鮮なる啓蒙的熱情に充ちてゐるとさへ思はれる。然るに當時 Historische Zeitschrift 誌上においてドプシュも既に批評したやうに、後卷のゲルマン諸國家建設期に及ぶと、此の書の價値は著しく低下してゐる感あるを免がれなかつた。

この意味において此所にあげた氏の近作 Les Invasions germaniques は恐らく前著の缺陷を償ふものと想像され、また爾來數年の間に著者の見解には如何なる進歩乃至は變化を來してゐるのであるか、更に又かの民族移動期研究に劃期的方向をば開示したフュステル・ド・クーランジュの名著 (l'Invasion Germanique) 以來稍寂寥の感を免がれなかつた佛國の民族移動學者が、今世紀において如何なる成績をあげつゝあるのであるか、之等の意味において本書の出現に對しては尠からぬ期待が繫がれたのである。

遺憾ながら本書は入門書的普及的立場が主要關心をなしてゐて吾人の期待は充分に酬いられない。然し乍ら研究の進歩が加速度的に著しく、而も前世紀來の謬見は專門學徒の間にさへもその根跡を尙ほ止めてゐる今日において、假令大學生程度を目標として書かれた入門書と雖も、それが現學界の標準的學者の手に成るものである以上、その出現は極めて有意義であり、吾人はこれが普及をば切に希望せざるを得ない。のみならず專門的關心のみから見ても、本書はなるほど過大なる期待の下に繙かるべきものではないけれども、同時にまた輕視せらるべきものでもない。私自身の率直なる所感を言へば、期待は充たされはしなかつたけれども決して失望はしなかつたのである。以下讀過の際記憶に留つた箇所につき二三の印象的批評を述べて紹介に代へよう。

先づ「移動以前」のゲルマンに關する著者の知見は何等特筆するに足るべきものを有つてゐない。今世紀最大のゲルマン學者と見做されるルードイッヒ・シュミットには一歩も出てゐない。然しシュミットに從ふと言ふことはむしろ謙虛且つ聰明な態度であつて非難さるべきことでない。唯言語學的或は人種學的記述に劃く頁數があるならば、近來先史ゲルマン研究上最も注目すべき業績をあげてゐるコッシナ (Kossina) 以後の考古學的問題に均霑させて貰ひ度かつたと思はれる。社會經濟的問題についても同樣である。

三世紀以前におけるゲルマンの狀態變化は本書においても依然不明瞭である。カエサル及びタキトゥスがそれを記してゐる紀元

前後のゲルマンと、四世紀末移動開始期のゲルマンとの間に横はる約三世紀間においてその社會生活には如何なる變化が起つてゐるのであるか、例へばフランクといふ全然新しい民族團が現れてゐるのもこの時期である。かようにゲルマン研究上最も重大なる時期であるに不拘、從來の研究が殆んど等しく空白を殘してゐる。本書もまた單に帝國の邊境問題と言ふ常套的形式を踏襲してゐるにすぎないのを見るとき、この方面の研究の前途は依然として希望なき暗黑面であるとの豫想を抱かざるを得ない。

「移動以前」は然し本書にとつては寧ろ附屬的部分であつて、本書の主眼とするところは正に「移動そのもの」に他ならない。その「移動そのもの」をば相互侵潤過程 (la pénétration mutuelle du monde barbare et du monde Romain)、或は發展的融合過程 (fusion progressive) と考へる立場は、今日專門學徒の間では既に常識であるが、然しこの立場は如何に繰返しても强調しすぎるといふことはない。三八〇年西ゴート定着に對し、ギボン、デュリー等舊史家の見解を痛烈に批判した後、此の定着の特殊性をば、それ以前の定着樣式 (soldat-laboureur) に對して、entrés en masse, corps étranger, État dans l'État として再認識の下に置き États Romano-germaniques の出發點たることを主張した點については全幅的同感を吝しまないのであるが、唯諸國家における相互侵潤過程の叙述が人種的言語的方面 (Influences linguistiques, ethniques) に多くの頁を割いて Influences politiques, juridiques, artistiques がそれに對應するだけの部分を占めてゐない。殊に經濟事實の取扱ひが、なるほどその基本的事實は決して逸脫されてゐないけれども、正當なる比例を得てゐるといふことは出來ない。

然し乍ら族民諸國家におけるローマ住民とゲルマン住民との關係について、兩要素の二元的並立の見解をば終始固持してゐることは注目に價する。氏は前述のやうに pénétration mutuelle の立場に立ち乍らも素朴な融合說に傾かないで却つてゲルマン諸王は兩要素の融合よりもむしろ並立卽ち非融合をば政治原則としたこと、兩仲民の對立感情は決して急速に調和しなかつたことを力說した後に、而も一方にはこの並立主義をば所謂征服說 (conquête véritable) に對しては飽くまで峻別し、かやうな並立段階こそキャタストロフ的轉換を緩和する段階であるといふ點においてその意義を强調したことは流石に大家の名にそむかない堅實にして圓熟せる見識であるといふべきであらう。

このやうな含蓄ある學識を有するこの著者が、一方においてはアッチラ侵入事件をばアジア的支配の脅威に曝された世界史的危機と考へる陳舊な見解をば依然として固執することは寧ろ奇異に感じられる。ベリーによつて既に說かれてゐるやうに、アッチラの帝國が假にガリアに永久的國家を建設し得たとしても、――アッチラの國家の特質はむしろその不可永續性にあると考へられるけれども、假りに一步を讓つて永久的國家を作り得たとしても――それは決してアジア主義によつて西洋文化の發展を中斷するものでなく、反對に彼等は他のゲルマン族と同樣なるローマ風ゲルマン風二重國家を建設したであらうと想像せられる。實際アッ

チラ支配の下には多くのゲルマン要素が含まれてゐて既にガリア侵入以前に、或る程度までゲルマン化してゐたことが確かめられる。永久的定着生活につれてゲルマン化は當然より一層進展すべきである。現に同じくアジア民族であるアラーニー族は全くゲルマンに同化した結果當時の人々はローマ人もゲルマン人も之をばゲルマンと區別してゐない。アッチラ侵入の意義は舊史家が想像したやうなキャタストロフ的性格にあるのでなく、ゲルマン諸族の勢力關係並に配置を一變したことゝ、ローマ帝國にとつて最も危險なる存在であつた東部ゲルマン諸族を萎縮せしめて間接に帝國崩壞過程を延長した點にあると考へられる。即ち匈奴帝國の出現と雖も民族大移動を貫く一般的潮流の裡において理解さるべきもので、之に對する例外現象とすべきでないと吾人は考へ度いのである。この意味において私は、ロート氏の見解に贊同し得ない。氏が動もすればアルファン (Halphen) 氏と同樣にゲルマン民族移動をば、ノルマン侵入、スラヴ、マジャール侵入、蒙古侵入などと共に廣義の移動の裡に含めしめんとする傾向を有つ點についても同樣に私は承服出來ないのである。

かのフェリクス・ダーンの古典的名著以來或はゲルマニスト、或は歷史家、或は考古學者の側から現れたゲルマン研究の文獻は決して少しとはしない。今世紀においてもシュミット、コッシナ、ドプシュ諸家の研究は既に十九世紀的研究段階に對して瞭らかに今世紀的段階を標識してゐること周知の如くである。然し乍ら、ゲルマン研究は直ちに民族移動の研究ではない。民族移動は一個の世界史的段階であり、從つてその研究も普遍史的見解に基かなければ根柢の淺薄なものとなることを免がれぬ。一九二八年故ベリー氏の牛津大學における講義の發後出版はかやうな世界史的時代として取扱はれた民族移動史の好個の概觀を提供するものであつた。ロートの此の著述は之に對して敢て質的に優れたものと考へることは出來ないけれども、量的にはたしかに一段と綿密豐富にして且つ、整備したものといふことが出來る。私が此の著によつて得た悅びは今世紀の民族移動研究も、今やこのやうな體系的叙述に統一され得るまでの狀態に一應安定して來たといふ一事である。〔鈴木成高〕

○F. Meinecke : Die englische Frühromantik des 18. Jahrhunderts als Vorstufe des Historismus.

(H. Z. 152. Heft 2, 1935.)

すでに吾國に於いても知られてゐるやうに、マイネッケは此の第一五二卷を以て、Hist. Zeitschr. の編輯者の地位を退き、次の第一五三卷から K. A. von Müller がこれに當ることとなつた。此の第一五二卷の末尾に附せられた報告が云つてゐるやうに、マイネッケは、此の雜誌の第七二—七六卷の五卷を H. v. Sybel 及び H. v. Treitschke と共に共同編輯する任に當つて後、一九〇〇年以降は唯一の責任監輯者として此の雜誌の發展に努力した。即ち「彼は三十五年間以上にわたつて此の Hist. Zeitschr. の精神的指導者であり、今までに刊行された卷數一五二の半以上は、編輯者としての彼の名を記載してゐる」のである。彼がこの指導者として